



# ジェラルド・ド・ネルヴァルとウジェーヌ・スクリーブ

著者	間瀬 玲子
雑誌名	筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部紀要
号	10
ページ	57-68
発行年	2015-01-31
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1219/00000473/">http://id.nii.ac.jp/1219/00000473/</a>

# ジェラルド・ド・ネルヴァルとウジェーヌ・スクリーブ

間 瀬 玲 子

Gérard de Nerval et Eugène Scribe

Reiko MASE

## I. 序

19世紀の作家ジェラルド・ド・ネルヴァル Gérard de Nerval は1830年代から1850年代まで職業として演劇、オペラ、見世物などの劇評を雑誌、新聞等に投稿していた。劇評執筆が文学作品構築作業において重要な役割を果たしたという推論を立てた。そこでまずネルヴァルのプレイヤッド版第3巻巻末に収録されているネルヴァルの記事が掲載されている定期刊行物一覧を参考にして、フランス国立図書館電子テキストサイト Gallicaなどで雑誌・新聞の所蔵の有無を確認した。(1)所蔵されている雑誌・新聞記事はすべてダウンロードして保存した。書籍として販売されているものもできるだけ入手した。また『ネルヴァル辞典』*Dictionnaire Nerval*に記載されている雑誌と新聞に関する情報を熟読した。(2)ネルヴァルの劇評が多数掲載されている『アルチスト』誌 *L'Artiste* と『プレス』紙 *La Presse* は Gallica に所蔵されている。電子テキストの雑誌記事・新聞記事とプレイヤッド版を比較検討し、差違を確認した。プレイヤッド版は『アルチスト』誌や『プレス』紙の記事を忠実に再現していない場合がある。ネルヴァルの劇評で取り上げられている演劇等の台本の電子テキストも可能な限り Gallica 等で入手した。19世紀前半しか上演されなかった演劇の台本、特に上演時期と近い時期に出版された台本の入手は容易ではない。

上記の作業の過程において浮かび上がった事実は、ネルヴァルが台本作家ウジェーヌ・スクリーブ Eugène Scribe の作品についてかなり頻繁に論じていることである。本論文ではネルヴァルの劇評で取り上げたスクリーブの中で、ネルヴァルの言及が突出しているジャコモ・マイヤベーア Giacomo Meyerbeer とフロマンタル＝エリ・アレヴィ Fromental-Élie Halévy 作曲の作品を取り上げて、それがネルヴァルの文学作品生成にどのような役割を果たしたのかを考察したいと考える。

## II. スクリーブ

スクリーブは1791年に生まれ、1861年に亡くなった19世紀フランスの劇作家である。膨大な作品を残し、上記で紹介した Gallica には全集の電子テキスト版が収録されている。(3)他の劇作家との共同作業による作品に関するネルヴァルの劇評も存在する。そして重要なことはスクリーブが当時流行した大規模な舞台装置を設営したオペラの台本作家としても活躍し、当代随一の作曲家と組ん

だ作品を発表したことによって現代までその名前が残っていることである。19世紀前半にしか上演されなかった演劇作品だけを執筆したのであれば、忘れられた存在になったかもしれない。

ジャン＝クロード・ヨン Jean-Claude Yon が執筆した研究書『ウジェーヌ・スクリーブ』 *Eugène Scribe* の巻末に掲載されている「スクリーブの作品一覧表」によると、スクリーブが台本を書いた作品はヴァリエテ劇場、ヴォードヴィル劇場、ポルト・サン＝マルタン劇場、ゲテ劇場、オデオン劇場、オペラ＝コミック劇場、ジムナーズ劇場、オペラ座、パレ・ロワイヤル劇場、コメディ・フランセーズ劇場等で上演されたことがわかる。(4)ヨン氏によると、スクリーブの演劇の数は425である。そのうち最も上演数が多いジャンルは軽喜劇（ヴォードヴィル）の249であり、次がオペラ・コミック（歌とセリフを併用するフランスオペラ）の94である。肝心のオペラは30である。

スクリーブが台本を執筆した作品は当時大成功を収めたと言われている。しかしフランス演劇関係の書物にはスクリーブは今では知られていないと明言しているものもある。(5)

本論文を執筆するに際し、スクリーブが台本を書いたオペラの映像または音声をできる限り入手した。19世紀前半と今日ではオペラを取り巻く環境が異なっていることは理解している。しかしスクリーブの知名度が今日どの程度であるかを知ることは重要であると考え。(6)

### Ⅲ. マイヤベアーとアレヴィ

ネルヴァルが劇評で言及したスクリーブの作品の中で筆頭とも言えるぐらい言及されているのはマイヤベアー（表記が一定していないが、本論文では研究書を参考にしてマイヤベアーと表記する）である。マイヤベアーは1791年にフォーゲルストルフで生まれ、1864年にパリで亡くなった。フランスの演劇研究者エルヴェ・ラコンブ Hervé Lacombe は次のように書いている。

1824年の『エジプトの十字軍』の成功がフランスの首都の門を彼に開く。そこで台本作家ウジェーヌ・スクリーブとの決定的な出会いの後、彼はその時代の最も有名で最も影響力のある作品の中で『悪魔のロベール』（中略）『ユグノー教徒』（中略）『予言者』（中略）『アフリカの女』（中略）を作曲して、グランド・オペラの巨匠のひとりとなるであろう。(7)

19世紀前半にいくつものオペラで大成功を収めた人物である。しかし21世紀では19世紀ほどの評価を受けていない。なおグランド・オペラ *grand opéra* の定義に関しては本論文では取り扱わない。現時点でわかっていることはネルヴァルが「グランド・オペラ」という用語を全く使っていないことである。また上演に一番近い時期に出版された作品の電子テキストを見ても、オペラ *opéra* としか表記されていない。それに対してこの時期にオペラ・コミック *opéra-comique* という用語がすでに使われていたこともはっきりしている。

次にネルヴァルがスクリーブ台本で言及した音楽家はアレヴィである。彼は1799年にパリで生まれ、1862年にニースで亡くなった。上記で引用した著書でラコンブ氏は次のように書いている。

「ユダヤの女」(中略)で彼は彼の芸術の頂点に達する。19世紀にはほとんど絶え間なく演じられたが、オベールの『ポルティチのものの言わぬ娘』(1828)、マイヤペーア『悪魔のロベール』(1831年)に続いてグランド・オペラのジャンルを確立する。(8)

マイヤペーアとアレヴィは現在完全に忘れられた存在ではない。しかし19世紀前半ほどの輝きがあるとは言い難い状況である。

#### IV. ネルヴァルが注目したオペラとその影響

ここでネルヴァルが注目した作品に関する言及を引用してみよう。特に彼が三作品以上のオペラ作品を続けて列挙した文章に着目してみた。そしてその作品が劇評以外でも言及されているかどうかも考慮してみた。

まずネルヴァルは『演劇雑誌新聞』 *Revue et gazettes des théâtres* 1841年1月7日号に次のような記述を残している。

*Bruxelles.* — Le Grand-Théâtre a inauguré l'année 1841 avec la reprise de *La Muette de Portici*. La représentation a été fort brillante ; Mme Colon-Leplus et M. Laborde ont eu leurs triomphes accoutumés, et tout fait présager un succès de longue durée et qui rappellera ceux de *Robert*, de *La Juive* et des *Huguenots*. (9)

「ブリュッセル」グラン・テアトルは1841年のシーズンは『ポルティチのものの言わぬ娘』で始まった。上演はとても見事だった。コロ＝ルピュルス夫人とラボルド氏はいつもの大成功を収め、すべてが長期間の成功を予感させるし、『(悪魔の)ロベール』『ユダヤの女』『ユグノー教徒』を思い起こさせる。

ネルヴァルが大成功したオペラの例に挙げた3作品に関しては後に詳しく述べることにする。『ポルティチのものの言わぬ娘』は台本がスクリーブとジェルマン・ドラヴィーニユ Germain Delavigne が担当し音楽はダニエル＝フランソワ＝エスプリ・オベール Daniel-François-Esprit Auber が担当した5幕物のオペラである。1828年2月29日パリの王立音楽アカデミーで初めて上演された。(10)この記事をもどのように評価するかは非常に難しい問題をはらんでいる。文中のコロ＝ルピュルス夫人はジュニー・コロンのことである。ネルヴァルの文学世界の中で非常に重要視された女優である。しかしネルヴァルのコロンに対する描写を拡大解釈するのは問題ではないかと考えている。(11)

次にネルヴァルは『アルチスト』誌1844年3月31日号に次のように書いている。この記事はスクリーブのオペラ・コミック『セイレン』 *La Sirène* について論じている。(12)音楽はオベールが担当した。

*Robert le Diable, Les Huguenots, La Juive*, voilà ce qui démontrerait la première partie de notre proposition ; *La Dame blanche, Le Domino noir, La Part du diable*, par exemple, nous suffiraient pour la seconde. (13)

『悪魔のロベール』『ユグノー教徒』『ユダヤの女』、それが私たちの提案の第一部を示すであろう。例えば『白衣の婦人』『黒いドミノ』『悪魔の分け前』は私たちには2番目として充分であろう。

この一文でわかることは1844年に人気が高い作品が『悪魔のロベール』『ユグノー教徒』『ユダヤの女』の5幕物の三作品であるということである。この三作品に関しては後で分析を行う。『白衣の婦人』の台本はスクリーブ、音楽はフランソワ＝アドリアン・ボワエルデュー François-Adrien Boieldieu が担当した3幕物のオペラ・コミックである。1825年12月10日にオペラ・コミック劇場で初めて上演された。参考にした19世紀の辞典では7ページを割いて詳しく内容が記載されるほどの人気作品である。(14)『黒いドミノ』は台本がスクリーブ、音楽はオベールが担当したオペラ・コミック作品である。1837年12月2日に初めて上演された。(15)最後の『悪魔の分け前』は台本がスクリーブ、音楽はオベールが担当した3幕のオペラ・コミック作品である。1843年1月16日にオペラ・コミック劇場で初めて上演された。(16)第一グループは5幕物の大規模オペラ、第二グループは3幕物のオペラ・コミックである。

さてネルヴァルは『プレス』紙1845年9月1日号では次のように書いている。この記事は「シャルル6世。ロンドンのシーズンの終わり」《Charles VI》Clôture de la saison de Londres と題されている。

En France même, il y aurait injustice à n'accorder aucune gloire à l'idée première dans le succès de *Robert le Diable*, des *Huguenots*, de *La Juive* ou de *La Favorite* ... (17)

フランスですら『悪魔のロベール』『ユグノー教徒』『ユダヤの女』『ラ・ファヴォリット』の成功の最初の考えにかなる栄光も与えないのは不公平であろう。

ここでも先の引用で出た三作品が列挙されている。この三作品の人気はゆるぎないものであったと考えても間違いではなさそうである。ネルヴァルが最後に言及している『ラ・ファヴォリット』はアルフォンス・ロワイエ Alphonse Royer とギュスターヴ・ヴァエーズ Gustave Vaöz が台本を担当し、ガエターノ・ドニゼッティ Gaetano Donizetti が音楽を担当した4幕物の作品であり、1840年12月2日に音楽王立アカデミーで上演された。(18)

ネルヴァルは『プレス』紙1846年10月26日号のオペラ『ラ・ファヴォリット』と『オテロ』を論じている。ここで言及している『オテロ』はロッシニ作曲の作品でのことである。その中で次のように書いている。(19)

Il est bon de remarquer surtout que, depuis longtemps, les plus grands succès de notre opéra, *Robert, Les Huguenots, La Juive, La Reine de Chypre*, et en dernier lieu *La Favorite* doivent quelques choses aux *poèmes* très bien faits de ces ouvrages. (20)

ずっと以前から私たちのオペラのうち最も大きな成功を収めた『(悪魔の)ロベール』『ユグノー教徒』『ユダヤの女』『キプロスの女王』、最後に『ラ・ファヴォリット』は何かがこれらの作品のとてもよく作られた「詩的なもの」に負っている。

これらの四作品がネルヴァルにとって大成功を博したオペラという位置づけである。なお『キプロスの女王』は台本アンリ・ド・サン＝ジョルジュ Henri de Saint-Georges、音楽はアレヴィが担当した5幕のオペラである。1841年12月22日に音楽アカデミーで初めて上演された。(21)

最後になるがネルヴァルが1854年6月30日付でライプチヒからエミール・ブランシュ Émile Blanche 医師に宛てた書簡中の中に次のような記述がある。

Jusqu'ici je n'ai vu que des opéras connus : *Fidelio, Don Juan et Le Prophète*, ici *La Dame blanche* bien chantée en allemand. (22)

今まで有名なオペラだけを見ました。それは『フィデリオ』『ドン・ジュアン』『予言者』です。そしてこちらではドイツ語で上手に歌われた『白衣の婦人』でした。

この書簡ではネルヴァルはブランシュ医師からの送金を待っていること、音楽家フランツ・リスト Franz Liszt にこれから会いに行くこと、そしてリヒャルト・ヴァグナー Richard Wagner と自分の考えが近いことなどを言及している。さてここで注目したいのは『予言者』である。(23)『予言者』はスクリーブが台本を執筆し、マイヤベアが音楽を担当した5幕物のオペラであり、1849年4月16日国民劇場(オペラ座)で初めて上演された。初演の時から大成功を取めたと言われている。幸いにも Gallica には1849年『予言者』の図版の電子版が収録されている。(24)この2枚の図版を見るだけで、『予言者』の舞台装置が想像を絶するくらい豪華で壮麗であったことが理解できる。2枚のうちの1枚には「オペラ座 『予言者』 4幕、ミュンスター大聖堂におけるジャン・ド・レドの戴冠式 カンボンの装飾」と書かれている。シャルル＝アントワヌ・カンボン Charles-Antoine Cambon は当時活躍した舞台デザイン家である。この文字の上に HENRI VALENTIN と書かれている。アンリ・ヴァランタンは当時の挿絵画家の名前である。この図版によると『予言者』の舞台装置は高さ、幅、奥行きを相当必要とし、多数の俳優が舞台上にいたことになる。

ネルヴァルは『プレス』紙1840年8月24日号の中で「私たちは彼(マイヤベア)の新しいオペラを見ることになるのだろうか?それとも見ないのだろうか?」と書いている。(25)すでに記したように『予言者』が実際に上演されるのは9年後のことである。つまりネルヴァルはマイヤベアが『予言者』の準備をしていたことを知っていたのである。

その後『プレス』紙1850年9月9日号における記事からすでに引用したブランシュ医師宛ての書簡まで『予言者』を数度言及している。しかし他の作品と同列に扱うことはなかった。(26)

それではネルヴァルが劇評の中で当代随一と太鼓判を押したスクリーブが台本を執筆した次の作品について特筆すべきことを指摘してみよう。

## 1. 『悪魔のロベール』 *Robert le diable*

ネルヴァルは『アルチスト』誌や『プレス』紙に掲載した劇評で頻繁に『悪魔のロベール』について言及した。スクリーブとジェルマン・ドラヴィーニュ Germain Delavigne が台本を担当し、マイヤペーアが音楽を担当した5幕物のオペラである。1831年11月21日に王立音楽アカデミーで初めて上演された。(27)

ネルヴァルが『悪魔のロベール』を劇評以外で直接言及した例は少ししかない。それは『東方紀行』 *Voyage en Orient* (1851年) の「ラマダンの夜」 *Les nuits du Ramazan* 4「サン＝ディミトリ」 *San Dimitri* においてコンスタンチノーブルを描写している箇所である。

L'effet de lanternes voltigeant partout aux mains des promeneurs me faisait penser à l'acte des nonnes de *Robert*, — comme si ces milliers de pierres plates éclairées au passage eussent dû se lever tout à coup ... (28)

いたる所、散歩者の手にあるランタンの効果が私には『(悪魔)のロベール』の尼僧の行動を思い起こさせた。それはあたかも通行で照らされた多くの平たい石が突然起き上がらなくてはならなかったかのようであった。

ネルヴァルのプレイヤッド版の注にはこの一節は『悪魔のロベール』3幕の終わりを想起させると書いてある。(29)そこで『悪魔のロベール』の台本の中で上演に最も近い時期に出版された版(電子テキスト)を入手した。以下は3幕6場の最後と3幕7場の途中である。

A droite dans la mur, entre plusieurs tombeaux sur lesquels sont couchées des figures de nonnes taillées en pierre, on remarque celui de sainte Rosalie(...)Alors les figures de pierre, se soulevant avec effort, se dressent et glissent sur la terre. Des nonnes aux vêtements blancs apparaissent sur les degrés de l'escalier, montent et s'avancent en procession sur le devant du théâtre. (30)

右では壁の中、石像の尼僧が墓の上に横になっている。そこに聖女ロザリアの石像を見つける。(中略)それから石像が苦勞して身体を起こし、立ち上がり、地面を滑っている。白い服を着た尼僧たちは階段の段の所に現れて、登り、劇場の前方の上で行列を作って進んでいる。

確かに尼僧の姿もネルヴァルに強い印象を与えたであろうが、それ以上に強烈なのは「聖女ロザリア」の姿であろう。ネルヴァルの諸作品、とりわけ『火の娘たち』 *Les Filles du feu* (1854) の「オクタヴィ」 *Octavie* で言及される聖女ロザリアには『悪魔のロベール』の影響は考察するに値すると考える。(31)

## 2. 『ユグノー教徒』 *Les Huguenots*

次は『ユグノー教徒』について論じたい。本作品の台本はスクリーブとエミール・デシャン Émile Deschamps の共作、音楽はマイヤベーアが担当した5幕物のオペラである。1830年2月29日に王立音楽アカデミーで上演された。(32)ネルヴァルは劇評で本作品を頻繁に言及している。ネルヴァルはすでに引用した『プレス』紙1840年8月24日号に次のように書いている。

Dans *Les Martyrs*, il n'a produit beaucoup d'effet qu'au grand final. Mais dans *Les Huguenots* et dans *Guillaume Tell*, il a reconquis peu à peu tout le terrain qu'il avait perdu. Mlle Julian l'a fort bien secondé dans la représentation du premier de ces opéras, à laquelle assistait M. Meyerbeer, en personne surnaturelle. (33)

『殉教者』では彼（ジルベール＝リュイ・デュプレ Gilbert Louis Duprez）はグランド・フィナーレでしか大した効果を出せなかった。しかし『ユグノー教徒』と『ギヨーム・テル』では彼が失ったすべての領域を取り戻した。ジュリアン嬢はこれらのオペラの初日の上演をよく補佐した。それにマイヤベーア氏が超人的人物として参加した。

(注：『殉教者』はスクリーブとドニゼッティのオペラ、『ギヨーム・テル』はビス他とロッシーニのオペラ)

文中に出てくるデュプレは当時活躍したオペラ歌手である。ジュリアン嬢のほうはデビューして間もない歌手である。文中の言葉どおりに読むと、マイヤベーアは『ユグノー教徒』の上演に立ち会っていることになる。

## 3. 『ユダヤの女』 *La Juive*

最後に取り上げるのは『ユダヤの女』である。台本はアレヴィが担当し、音楽はマイヤベーアが担当した、5幕物のオペラである。1835年2月23日に王立音楽アカデミーで初めて上演された。(34)ネルヴァルは本作品を劇評で頻繁に言及している。そこで彼が作品で取り上げた例を引用してみよう。それは『ローレイ』(1852) *Lorely* である。

Un carrefour triangulaire, où aboutissent sept ou huit rues, encombré de marchands, de foule et



de voitures, rappelle tout à fait le premier décor de *La Juive* ... (35)

七つか八つの通りが到達する三角形の交差点は、商人、群衆、馬車でごった返していて、『ユダヤの女』の最初の場面を思いこさせる。

この一節はベルギーのリエージュを描写している。その町がネルヴァルに想起させるようなオペラや演劇は無数にあるはずである。それだけ『ユダヤの女』がインパクトのある作品であるという証拠であろう。

## VI. 結びに代えて

以上のようにネルヴァルが職業として執筆した劇評に出てくるスクリーブと音楽家二人（マイヤベアとアレヴィ）の仕事に限定して論じてみた。序でも書いたように過去には簡単には読むことができなかった『アルチスト』誌や『プレス』紙に掲載されたネルヴァルの劇評の電子テキスト版を読むことができるようになった。またネルヴァルの劇評で論じられたオペラ、演劇等の台本の電子テキストも入手できるようになった。

ネルヴァルが劇評として取り上げた台本作家の中で圧倒的にスクリーブの作品が多い。またその中でも作曲家マイヤベアとアレヴィの作品にはネルヴァルは特別の評価を下している。しかしそれがネルヴァルの文学作品生成にどのように関わるかについての議論は今後の課題であると考えている。今後もネルヴァルの劇評が掲載された他の雑誌を調査し、そこで論じられている作品の分析作業を続けたいと考えている。

### 注

(1) Gérard de Nerval, *Œuvres complètes*, tome III, Paris, Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1993, pp. 1491-1503. 以下ネルヴァルのこの巻を PL. III と略す。ネルヴァルの記事が掲載されている雑誌・新聞の中で Gallica などに電子テキストが収録されているものは全体の中でまだ少数である。

(2) Claude Pichois & Michel Brix, *Dictionnaire Nerval*, Du Lérot, Tusson, 2006.

(3) 本論文で論じるスクリーブの主要作品は Eugène Scribe, *Œuvres complètes de Eugène Scribe*, Troisième série, 6 vol, Paris, E.Dentu, 1875-1876 の電子テキスト版に収録されている。Gallica に収録されているスクリーブの全集は第1シリーズ（9巻）、第2シリーズ（33巻）、第3シリーズ（6巻、本論文で参考にした）、第4シリーズ（20巻）、第5シリーズ（8巻）と続いている。19世紀にはこのようにスクリーブの全集が発行されていた。膨大な作品を収録した全集に、ネルヴァルが劇評で論じた作品の中で収録されていないものがある。

しかしフランス国立図書館のカタログを調べても、20世紀以降の全集が見当たらない。また Amazon などのネット通販を調べてもスクリーブの全集は上記の Gallica の電子テキストを書籍化したものしか見当たらない。

(4) Jean-Claude Yon, *Eugène Scribe, la fortune et la liberté*, Saint-Genouph, Nizet, 2000. 本書にはルボー Roubaud が描いたスクリーブのカリカチュアが掲載されている（Planche VI）。

- (5) André Degaine, *Histoire du théâtre dessinée*, Saint-Genouph, Nizet, 1992 は劇場の歴史がイラスト入りで書かれていて、読んで楽しい書物である。タンブル大通り Boulevard du Temple 通称「犯罪大通り」(1815-1862) Le Boulevard du crime のどこが壊されて、どこが残っているのかを図解で示している(259ページ)。本書の273ページのブルジョワ作家のページに「著名であった後に、彼らは今日では完全に無名であり(スクリーブ)、とても忘れられている(オジエ)、ほとんど知られていない(デュマ=フィス、サルドゥー)」と手厳しい評価が記されている。同じ著者による André Degaine, *Guide des promenades théâtrales à Paris*, Saint-Genouph, Nizet, 1999, p. 92 にも「犯罪大通り」のイラストが掲載されている。2冊の本を両方参照すると、「犯罪大通り」の劇場の中でどれが現在でも残っているかがよく理解できる。
- (6) フランスのオペラに関しては次の書物を参考にした。Félix Clément et Pierre Larousse, *Dictionnaire lyrique ou histoire des opéras*, Paris, Administration du grand dictionnaire universel, (1881)。フランス国立図書館のカタログを調べると補遺がついた本書の出版年は1881年である。補遺がついていない版は1867-1869年に発行された。19世紀半ばにおいて各オペラがどのように解釈されていたかを知るには格好の書物である。Gallica の電子テキスト及び廉価版を参照した。スタンリー・セイディ『新グローヴ オペラ事典(普及版)』白水社、2011年によりスクリーブ台本のオペラの概要を調べた。本論文で論じたオペラの題名はこの事典を参考にした。一部参考にしなかった作品もある。Florence Naugrette, *Le théâtre romantique*, Paris, Edition du Seuil, coll. 《Points Essais》, 2001 の巻末に掲載された書誌情報を参考にした。ミヒャエル・ヴァルター 著、小山田豊 訳『オペラハウスは狂気の館』春秋社、2000年によりパリのオペラ座(現在のオペラ座とは違う)における劇場、監督、音楽家の金銭上の契約に関して知ることができた。オペラを社会学的なアプローチによって研究した本書はとても貴重である。岡田暁生『オペラの運命』中央公論新社、中公新書、2001年ではマイヤベーア『悪魔のロバール』『ユグノー教徒』、アレヴィ『ユダヤの女』についての言及を参考にした。澤田肇『フランス・オペラの魅惑』上智大学出版、2013では本論文で論じたオペラの概要を知るために参照した。
- (7) Hervé Lacombe, *Les voies de l'opéra français au XIX<sup>e</sup> siècle*, Paris, Fayard, 1997, pp. 338-339.
- (8) Ibid., p. 335.
- (9) Gérard de Nerval, *Œuvres complètes*, tome I, Paris, Gallimard, coll. 《Bibliothèque de la Pléiade》, 1989, p. 743. 以下ネルヴァルのこの巻を PL. I と略す。現時点ではこの記事の電子テキストの存在を確認していない。
- (10) *Dictionnaire lyrique ou histoire des opéras*, p. 468. 『新グローヴ オペラ事典(普及版)』, pp. 642-644 に本作品に関する詳細な情報が記載されている。注(3)で紹介したスクリーブの全集第3シリーズの第1巻に収録されている。
- (11) 『プレス』紙1837年8月14日号でスクリーブとジャン=フランソワ・バヤール Jean-François Bayard 台本、アレクサンドル・バットン Alexandre Batton 音楽の3幕物もオペラ・コミック『代りの者』*Le remplaçant* の劇評の中でコロンの言及されている(PL. I, pp. 367-373)。残念ながら現時点で本作品の電子テキストの存在は確認できない。しかし Gallica に本作品のマリーを演じるジェニー・コロンの舞台衣装を着ているのを描いたエッチング2枚が収録されている。*Dictionnaire lyrique ou histoire des opéras*, p. 570 には短い説明しかない。それによると、1837年8月11日にオペラ・コミック劇場で初めて上演された。
- また『プレス』紙1838年1月15日号でスクリーブとアンリ・ド・サン=ジョルジュ Henri de Saint-Georges 台本、アドルフ・アダン Adolphe Adam の『忠実な羊飼ひ』*Le fidèle Berger* の中でもコロンの言及されている(PL. I, pp. 374-379)。*Le fidèle Berger*, opéra-comique en trois actes, par MM. Scribe et de Saint-Georges, musique de M. Adam, Paris, Marchant, 1839 の電子テキストが Gallica に収録されている。1838年1月6日にオペラ・コミック王立劇場で初めて上演された。コロンはアンジェリックの役を

- 演じた。*Dictionnaire lyrique ou histoire des opéras*, p. 288 に簡単な説明が書かれている。注(3)で紹介したスクリーブの全集第4シリーズの第7巻に収録されている。
- (12) *La Sirène*, opéra-comique en trois actes, paroles de M. Scribe, Musique de M. Auber, représenté pour la première fois, à Paris, sur le théâtre royal de l'Opéra-Comique, le 26 mars 1844, Bruxelles, J. -A. Lelong, 1844. なお注(3)で紹介した全集の第4シリーズの第12巻にも収録されている。*Dictionnaire lyrique ou histoire des opéras*, p. 626 に本作品の概要が書かれている。
- (13) PL. I, p. 786. Gallica に収録されている『アルチスト』誌電子テキスト版 *L'Artiste, Beaux-Arts et Belles-lettres*, 3<sup>e</sup> série - Tome V, Paris, Aux Bureaux de l'Artiste, 1844, p. 207 では『悪魔のロベール』は *Robert-le-Diable* と表記されている。
- (14) *Dictionnaire lyrique ou histoire des opéras*, pp. 184-190. *La Dame blanche*, opéra-comique en trois actes, paroles de M. Scribe, musique de M. Boieldieu, Bruxelles, J. -B. Dupon, 1826 を参考にした。なお注(3)で紹介したスクリーブの全集第4シリーズの第2巻にも収録されている。
- (15) *Dictionnaire lyrique ou histoire des opéras*, p. 219. 注(3)で紹介したスクリーブの全集第4シリーズの第6巻に収録されている。
- (16) *Dictionnaire lyrique ou histoire des opéras*, pp. 514-515. 注(3)で紹介したスクリーブの全集第4シリーズの第11巻に収録されている。
- (17) PL. I, p. 1009. Gallica に収録されている *La Presse*, Lundi 1<sup>er</sup> septembre 1845 の電子テキスト版では《*la Juive*》《*de la Favorite*》と表記されている。
- (18) *Dictionnaire lyrique ou histoire des opéras*, p. 276-277. *La Favorite*, opéra quatre actes, paroles de MM. Alphonse Royer et G. Vaëz, musique de M. G. Donizetti, Bruxelles, J. -A. Lelong, 1840 を参考にした。
- (19) *Dictionnaire lyrique ou histoire des opéras*, p. 505. ネルヴァルの記事の中に「ベッティーニ氏が金曜日に『オテロ』に出演した」(PL. I, p. 1097) という記述がある。Gallica には舞台衣装デザイン家ポール・ロルミエ Paul Lormier が描いた『オテロ』の舞台衣装の下絵の水彩画3枚が収録されている。最初の2枚は1844年であるが、3枚目には1846年とベッティーニ氏という文字が読み取れる。
- (20) PL. I, p. 1096. Gallica に収録されている *La Presse*, Lundi 26 octobre 1846 の電子テキスト版では *la Favorite*, となっている。
- (21) *Dictionnaire lyrique ou histoire des opéras*, pp. 567-568. *La Reine de Chypre*, opéra en cinq actes, paroles de M. de Saint-Georges, musique de F. Halévy, Paris, Maurice Schlesinger, 1841 を Gallica から入手して参照した。現時点では『キプロスの女王』の映像・音声を手に入していない。
- (22) PL. III, p. 877. この書簡の翻訳は『ネルヴァル全集 VI 夢と狂気』筑摩書房、2003年に収録された『書簡』を参考にした。
- (23) *Dictionnaire lyrique ou histoire des opéras*, pp. 551-553. 『新グローヴ オペラ事典(普及版)』, pp. 730-733に作品の詳しい概要が書かれている。
- (24) *Le Prophète*, opéra d'Eugène Scribe et Giacomo Meyerbeer, Illustration de presse, Paris, 1849.
- (25) PL. I, p. 640. Gallica に収録されている電子テキスト版 *La Presse*, Lundi 24 août 1840 も参照した。引用の箇所には差違はない。
- (26) Gérard de Nerval, *Œuvres complètes*, tome II, Paris, Gallimard, coll. 《Bibliothèque de la Pléiade》, 1984, p. 1186. 以下この巻を PL. II と略す。
- (27) *Dictionnaire lyrique ou histoire des opéras*, pp. 582-583. 『フランス中世文学集 3』白水社、1991年に収録された天沢退二郎訳『悪魔のロベール(作者不詳)』と解説を参考にした。
- (28) PL. II, p. 622. 本作品を翻訳する際に『ネルヴァル全集 III 東方の幻』筑摩書房、1998年に収録された野崎歙・橋本綱 訳『東方紀行』を参考にした。
- (29) PL. II, pp. 1568-1569.

- (30) *Robert-le-diable*, opéra en cinq actes, paroles de MM. Scribe et Germain de Lavigne (sic), musique de M. J. Meyerbeer, Paris, Bezou, 1831, p. 35. Delavigne の綴りが間違っている。プレイヤッド版に引用されているテキスト（1833年にブリュッセルの書店により発行）と比較した結果、差違はなかった。ところが注(3)で紹介したスクリーブ全集第3シリーズの第2巻（1875年～1876年）に収録された『悪魔のロベール』と比較すると多少違いがある。
- (31) ネルヴァルのプレイヤッド版の注に書かれているように、ネルヴァルの友人テオフィル・ゴーチエ Théophile Gautier の『コンスタンチノーブル』 *Constantinople* の13章「スクタリの墓地」 Le Cimetière de Scutari に「何度も私はペラの墓地を通った。最も幻想的な月の光で、白い陰鬱な柱が暗がり立っている時、それはあたかも『悪魔のロベール』の3幕の聖ロザリーの尼僧のようで（後略）」 (Théophile Gautier, *Constantinople*, Paris, Michel Lévy, 1873, p. 157) と書かれている。友人同士のネルヴァルとゴーチエが共通の思い出を持ったことは留意すべきであろう。Théophile Gautier, *Constantinople*, Paris, Bartillat, 2008, p. 196 も参照した。
- (32) *Dictionnaire lyrique ou histoire des opéras*, pp. 347-348. 『新グローヴ オペラ事典（普及版）』 pp. 724-728. 注(6)で紹介した『フランス・オペラの魅惑』 pp. 113-122に作品の概要、作曲家、作品の背景が詳しく書かれている。注(3)で紹介したスクリーブの全集の第3シリーズの第3巻に収録されている。
- (33) PL. I, pp. 639-640. 注(25)と同様に『プレス』紙の電子テキスト版と照合した。電子テキスト版では *les Martyres, les Huguenots* と記されている。
- (34) *Dictionnaire lyrique ou histoire des opéras*, pp. 388-389. 『新グローヴ オペラ事典（普及版）』, pp. 728-730. 注(6)で紹介した『フランス・オペラの魅惑』 pp. 105-112に本作品に関する詳細な説明が書かれている。
- (35) PL. III, p. 184. 翻訳する際に『ネルヴァル全集 V 土地の精霊』筑摩書房、1997年に収録された丸山義博・村松定史 訳『ローレイ』を参考にした。

本論文を執筆す際、以下のDVDを参考にした。

1) DVD Robert le diable

指揮 ダニエル・オーレン 演出 ローラン・ペリー  
 ロベール役 ブライヤン・ヒメル  
 ロイヤル・オペラ・ハウス管弦楽団  
 セット・デザイン シャンタル・トーマス  
 2012年12月15日コベント・ガーデンのロイヤル・オペラ・ハウスで録画  
 Opus Arte

2) DVD Les Huguenots

指揮 リチャード・ボニング 演出 ロトフィ・マンズーリ  
 マルグリット・ド・ヴァロワ役 ジョーン・サザーランド  
 エリザベス・シドニー管弦楽団  
 1990年 シドニー・オペラ・ハウス  
 Opus Arte  
 (他にステファン・ゾルテツ指揮のDVDも参考にした)

3) DVD La Juive

指揮 ヴィエコスラフ・スーティエ 演出 ギュンター・クレマー

エレアザール役 ニール・シコフ  
ウィーン国立歌劇場管弦楽団  
2003年 ウィーン国立歌劇場 録画  
ドイツ・グラモフォン ORF

DVD を入手できなかった『予言者』『ポルティチのものの言わぬ娘』『白衣の婦人』『オテロ』（ロッシーニ）は CD を視聴した。

『ラ・ファヴォリット』（ラ・ファヴォリータ）はイタリア語版の DVD を鑑賞した。本論文では言及しなかった『黒いドミノ』『アイデまたは秘密』の DVD も鑑賞することができた。

謝辞：本研究は JSPS 科研費25370391の助成を受けたものです。

（ませ れいこ：英語メディア学科 教授）